

見エタ。佛、伊、獨ノ主席代表ハ既ニ壽府ヲ去ツテ、此日ノ總會ニハ顔ヲ見セナカツタガ、之ニ依ツテモ上海問題ニ對スル英國ノ關心振ヲ窺ヒ得ルト思フ。

協定調印上海事件終了

支那ノ策動デ長イ間壽府滞在ヲ餘儀ナクサレタ筆者ハ、着佛後最初ノ聯盟トノ大刀打モ濟ンダノデ、五月一日巴里ニ歸ツタガ、協定ハ五月五日重光公使ノ病床デ調印セラレ、之ニ依リテ上海問題ハ終幕ヲ告ゲタ。

第八章 帝國政府ノ對外國策ト日佛提携

佛國「エリオ」内閣

佛國ノ「エリオ」内閣ハ昭和七年六月四日ニ成立シ、「エ」ハ同時ニ外相ヲモ兼攝シタ。筆者ハ十一日同氏ニ面會シテ祝辭ヲ呈スルト同時ニ氏ガ、從來日佛兩國親善増進ノ爲メニ盡シテ呉レタ努力ヲ感謝シタ。氏ハ里昂ノ市長デアルガ、同時ニ同地ノ日佛協會ノ會長デアル。一應ノ挨拶後筆者ハ滿洲問題ニ言及シタ處、氏ハ本問題ニ對スル日本ノ立場ハ能ク了解シテ居ルガ、此問題ニハ實際的ノ方面ト共ニ法律上ノ方面モアル様ダト述ベタ。後段ハ氏ノ率ユル急進社會黨側ノ意見ヲ反影スルモノデアルカラ、此際其謬見ヲ指摘シテ置クコトガ肝要ダト考ヘ、筆者ハ滿洲問題ノ起源カラ帝國軍ノ行動ノ正當ナコトヲ縷述シタ後、滿洲問題ガ日本ニ取リ死活ノ案件デアルコトヲ力説シタ處、「エ」首相ハ本問題ニ付テハ未ダ閣僚ト意見ノ交換ヲシタコトハ無いガ、將來滿洲問題ニ關シ日本ガ難局ニ遭遇シタ場合ニハ忌憚ナク相談サレタイ、自分ハ眞摯援助ヲ惜マヌ覺悟ダト答ヘタ。

佛國內閣ニハ相當數ノ「スー、スクレテール、デタ」ヲ配置スルヲ常トスル、政務次官ト譯ス外ナイガ彼等ハ閣員デアリ、從ツテ閣議ニ列スルカラ、我國ノ政務次官ヨリ其地位ガ高イト云ハネバナラヌ。佛國外務省ニハ近年之ヲ置ナカツタガ「エリオ」内閣ハ「バガノン」氏ヲ外務省政務次官ニ据エタ。氏ハ「グルノーブル」

選出ノ代議士デ急進社會黨所屬デアル。筆者ハ六月十一日氏ノ訪問ヲ受ケ初メテ會談シタガ、親日氣分ガ相當濃厚ノ様ニ感ジタ。

日佛提携ノ望ミ薄

然シ日佛提携ノ如キ政治的工作ハ決シテ容易ノ業デハ無イ。況ンヤ五月ノ總選舉デ左黨合同大勝利ヲ博シ、保守黨内閣倒レシ後ニ於ケル此工作ガ、更ニ一層ノ困難ヲ加ヘタコトハ敢テ贅言ヲ要セヌ。當時佛國ガ極東ニ有スル利害ハ極メテ微々タルモノデ、印度支那ニ對シテ大關心ガアルニハ相違ナイガ、此殖民地ノ安全ハ現在殆ンド脅カサレテハ居ラス。佛國トシテ最重要ナ國際懸案ハ賠償問題ト軍備問題トデ、前者ニ付テハ獨、英、米、後者ニ付テハ之ニ伊國ヲ加ヘタ大芝居デアルカラ、利害關係ノ薄イ支那問題デ日本ガ何カ誘ヒヲ掛ケテモ、大切ナ英米ノ意嚮ト沒交渉ニ日本ト話ヲ進メル勇氣ハナイ。即チ極東問題ニ關シテ佛國ニハ自主外交ガ無イノデ、殊ニ左黨政府ノ成立以來此傾向ハ著シキヲ加ヘ、日佛提携ノ實現性モ亦從ツテ稀薄ト成ツタ。

佛國ノ滿洲投資團

然シ何トカシテ今迄ヨリモヨリ多ク佛國ヲ日本ニ牽キ付ケル工風ハ無イモノデアルカ、幸ヒ佛國ニハ今金ガ呻ツテ居ル、之ヲ滿洲ニ投資サセルコトニ成功スレバ、佛國ノ資本家ハ同地ニ利害ヲ感ズルコトニ成リ其結

果自己ノ利益ノ爲メニ、從ツテ反射的ニ滿洲國ノ利益ノ爲メニ、新聞ヲ繰繰スル必要ヲ感ジテ來ル。殊ニ大資本ノ海外投資ニハ佛國デハ政府ノ諒解ヲ必要トスルカラ、財團ハ相當ノ運動費ヲ使用スルシ、其收得者ハ勢ヒ滿洲國ノ肩ヲ持ツコトニ成ル。即チ一石二鳥以上ノ收獲デアルカラ、此工作ノ歩ヲ進メ、昭和七年九月「ドリル」ヲ主班トスル佛國企業團ヲ滿洲ニ出發セタガ、容易ニ話ガ纏マラズ、滿鐵トノ間ニ組合契約ノ出來タノハ昭和八年二月二十八日ノコトデ、既ニ時機ヲ失シタノミナラズ、其後ノ活動亦豫期通りデ無イノハ頗ル遺憾千萬デアル。

安南亡命者關係日佛情報交換案

其二ノ工作ハ佛國ガ長年來氣ニ病ンデ居ル在日安南革命黨ノ取締ト交換的ニ、上海佛租界ニ於ケル朝鮮人間題ヲ解決スルコトニ依ツテ、日佛兩國ノ提携ヲ進メルコトデアル、偶々六月七日附ノ公信デ本省カラ、四月二十九日ノ上海兇變犯人タル朝鮮人ハ佛租界ニ居タ者デ、是等暴漢ノ取締ヲ嚴密ニスル爲メ、日佛兩國情報ノ交換ヲ更ニ勵行セント欲シテ居ルカラ、或ハ佛國政府ト直接ニ交渉ヲ開ク様ニ成ルカモ知レヌト云フテ來タ。由來上海ノ佛租界ハ朝鮮亡命者ノ集合地、策源地デ、我國ハ其看視ニ困ツテ居ルノデ、今迄モ情報交換ヲ行ツテ居ヌ譯デハ無イガ、國家間ノ取極ガ無イト徹底的ニ行カヌ。又日本ニハ安南ノ亡命者ガ居テ其背後ニ複雑ナ事情ガアルノデ佛國ハ困ツテ居ル。若シ帝國ガ對内的些事ヲ捨テ此兩件ヲ按配シ、依テ以テ日佛ノ提携ヲ實現シ得ルニ於テハ、是レ以上ノ満足ハ無イノデアルカラ、七月二十八日筆者ハ内田外相ニ宛テ、佛

國政府ハ印度支那ニ於ケル共產運動ノ取締ニ付テハ餘程痛心ノ模様デ、前內閣ノ植民大臣「レーノー」氏ガ昭和六年同地ニ出張シタ主ナ目的ハ此取締ニアツタトノコトニモアリ、印度支那ハ既ニ蘭領印度ト共產運動取締ニ關シテ情報交換ノ約束ヲシテ居ル。故ニ前記公信ノ申入ヲ佛國政府ニ爲スニ當テハ、問題ヲ廣メ、印度支那其他極東ニ於テ佛國ガ緊密ノ利害ヲ有スル地方ノ安寧ヲ紊亂セムトスル共產運動其他各種ノ企圖ニ關シ、日本ノ有スル情報ヲ佛國ニ與フルト同時ニ、佛國側ノ有スル日本關係ノ同種ノ情報ヲ我方ニ供給セシメ相互ニ情報ノ交換ヲ爲スコトヲ提議シ、出來得レバ一九〇七年日佛協約ノ追補ノ形式トシテ取極マスレバ、相當ノ政治的效果ガアルト思フト電報シ、之ガ決行ヲ促シタガ、終ニ返事ハ來ナカツタ。

佛 國 ノ 新 聞

佛國ノ新聞論調ハ筆者ノ着任前カラ日本ノ行動ニ對シテ大ニ理解のデアツタ、勿論左派ニ屬スル新聞ハ初メカラ捉ハレテ居ルノダカラ矯正ノ仕様ガナイガ、中堅階級、智識階級ノ愛讀スル諸新聞ハ、事態ヲ正解シ我立場ヲ擁護スルヲ客マナカツタ。之ハ記者ガ極東殊ニ支那ノ事情ニ精通シテ居ル結果、其信念ノ反影デアルニハ相違ナイガ、我大使館ガ常ニ記者ト友好ナル接觸ヲ保チ、指導啓發宜シキヲ得タ效果ノ現ハレデアルコトモ見逃シテナラス。ソシテ茲ニ特筆シテ置カネバナヌコトハ、右啓發運動ノ爲メ、我々ハ少シモ金錢上ノ關係ヲ作ラナカツタ事デ、此點ハ帝國ノ立場ヲ支持スル佛國記者ノ人格ヲ如實ニ表明スルト同時ニ、其支持ガ如何ニ高潔デアリ、又日本ニ取り如何ニ貴重デアルカヲ物語ルト思フ。

帝國政府ノ對外國策

筆者ハ九月十八日事件ノ勃發當初ヨリ、斯クノ如キ重大時機ニ際シテハ、政府ハ一日モ速カニ其對策ヲ定メ廟議ヲ決シテ正々堂々ノ陣ヲ張り、所信ニ向ツテ邁進スルト共ニ、在外使臣ニ行動ノ規準ヲ指示スベキダトノ信念ヲ懷キ、屢々之ヲ幣原外相ニ進言シタガ、遂ニ其事ナクシテ內閣ハ更迭シタ。筆者ハ同一意見ヲ犬養首相及芳澤外相ニ獻議シ、東京出發ノ間際迄之ヲ繰返シタガ、犬養內閣カラモ亦此種政策ノ開示ハ受ケズニ終ツタ。齋藤內閣ガ出來、內田伯ガ外務大臣ニ就任サレタカラ、筆者ハ祝賀狀中ニ、前編ニ書イタ明治四十四年十月同外相ノ國策訓示ヲ引用シ、滿洲問題ニ關スル感想ヲ述ベテ、七月十七日之ヲ發送シタ。幾何モナク啓發運動ニ關スル入電ニ接シタカラ、筆者ハ此機會ヲ捉ヘ、帝國國策ノ全般的指示ナキ限り、在外各公館ノ啓發運動モ支離滅裂トナリ、又徹底のニ一方向ニ邁進スルコト不可能故、此際是非共國策大綱ノ開示ヲ得タイト進言シタラ、八月二十四日左ノ電報ヲ受取ツタ。

今般本大臣及陸海軍大臣ノ間ニ、左ノ通り時局處理方針ヲ申合せ、且ツ總理大臣其他閣僚ノ諒解ヲ得タリ。就テハ右方針遂行ノ爲メ必要ナル具體的措置ニ關シテハ、隨時申進スルコトアルベキモ、全般的ニ其趣旨御含ノ上、各種ノ問題ニ對應セラレ、帝國ノ立場ヲ有利ナラシムル様、此上トモ御努力相成タシ。

一、國際關係ヨリ見タル時局處理方針。

我對支關係ノ將來ハ種々ナル波瀾アルベク、殊ニ滿洲問題ハ今後共幾多ノ難關ヲ包藏セルモノト思考セラ

レ、將來形勢ノ推移如何ニ依リテハ聯盟ヨリ又ハ列國共同シテ、帝國ニ對シ重大ナル現實ノ壓迫ヲ加フルガ如キ極端ニ險惡ナル事態發生ノ絶無ヲ期シ難キ次第ナル處、萬々一右様ノ壓迫來ルニ於テハ、我方亦實力ヲ以テ之ヲ排除スベキコト勿論ニシテ、政府ハ斯クノ如キ場合ニ具フル爲メ、早キニ及ンデ各般ノ準備ヲ整ヘ、斷乎タル決意ト周到ナル用意ヲ以テ、今後ノ事態ヲ處理スベク、國際關係ヨリ見タル對策ハ左記方針ニ依ルコト、致シタシ。

(一) 帝國獨自ノ立場ニ於テ滿蒙經略ノ實行ニ邁進スルヲ以テ、前記ノ事態ニ處スベキ帝國外交ノ樞機タラシムルコト。

(二) 支那本部、聯盟及列國ニ對スル關係ニ於テハ、概ネ左記要項ニ則リ措置スルコト。

イ 支那本部

帝國ノ對支那本部策ハ帝國ノ對滿政策ト切離シ、主トシテ其貿易及企業市場タル性能ヲ充分發揮セシムルヲ以テ趣旨トスベク從ツテ我滿蒙經營ニ支障ヲ及ボサル限リ、列國ト協力シテ支那本部殊ニ經濟上列國ト重要關係ヲ有スル地域ノ和平ヲ保持シツ、其門戸ヲ開放セシムルニ努ムベシ。尙ホ帝國ノ對滿蒙政策ト對支那本部策トニ本質的區別アルコトヲ機會アル毎ニ如實ニ示シ、關係各國側(中華民國ヲ含ム)ヲシテ帝國ノ支那本部ニ對スル政策ニ付、無用ノ杞憂ヲ抱カシメザルニ努ムベク、差當リ左ノ要綱ニ依リ處理スルコト。

(一) 最近支那本部ニ於ケル地方政權ノ分立狀態ハ益々顯著トナル傾向アル處、我方ニ於テハ右政局ノ推

移ヲ注視シツ、比較的穩健ナル態度ヲ執ル政權ニ對シテハ、成ルベク其立場及面目ヲ尊重シツ、進ンデ好意的態度ニ出テ、我ニ有利ニ誘導スルコト。

各種案件ハ事情ノ許ス限リ各地方政權トノ間ニ實際的解決ヲ計リ、以テ事端ノ發生ヲ避クルニ努ムルコト
前記兩項ノ實行ニ當リテハ、努メテ列國ニ對スル拔ケ駈ケ的行動ヲ避ケ、列國ヲシテ帝國ト協力セシムル様誘導スルコト。

叙上ノ見地ニ基キ、上海方面及其他ニ於テハ、左記要領ニ依リ措置スルコト。

甲、上海方面ノ平靜確立及安全保障ニ關シテハ、専ラ外交手段ニ依リテ之ガ解決ヲ計ルコト、シ、圓卓會議ノ開催ニ依リ、若クハ現地在留外人及支那側有力者間ノ機運ヲ助成シテ、可及的速カニ右目的達成ニ努ムルコト。

乙、支那本部ノ沿岸及長江沿岸ニ於テ今後萬一居留民ノ生命財產危殆ニ頻スルガ如キ重大ナル事態發生ノ場合ニハ、上海、青島及漢口以外ノ遠隔地ニ於テハ、適宜居留民ノ引揚ヲ行フコト。

尙ホ漢口ニ於テ事態重大化シ、海軍ヲ以テ現地保護ヲ行ヒ得ル見込ナキ場合亦同シ。

丙、山東地方及北支ニ於テハ、差當リ前記ノ如キ危險、甲及乙ノ地方ヨリモ少ナシト認メラル、ヲ以テ出來得ル限リ平靜ヲ保持スルニ努ムベク、右ニ付テハ外務及陸海軍出先官憲ニ於テ特ニ協調ニ努力スルコト。尤モ叙上努力ニ拘ラズ、萬一該方面ノ治安ガ著シク亂レ、帝國臣民ノ生命財產及其重要權益ノ保護上絶對的必要アル場合ニハ、派兵ヲ行フコトアルベシ。

丁、支那本部ニ於ケル我商權ノ進展及同方面居留帝國臣民ノ生活安定ノ爲メ、政府ニ於テ適當ニ之ヲ指導スルト共ニ必要ノ財政的援助ノ途ヲ講ズルコト。

居留民中好シデ事端ノ惹起ヲ計ルガ如キ徒ニ對シテハ、外務出先官憲ニ於テ陸海軍側ト協力シテ嚴重取締ヲ加フルコト。

ロ 聯 盟

此上トモ帝國ノ滿蒙ニ對スル多大ノ關心ト我公正ナル態度ニ關シ、充分認識セシムル様誘導スル一方、我方ヨリ挑發的態度ヲ示スコトヲ避クベキモ、聯盟側ヨリ進シテ帝國滿蒙經略ノ根本ニ觸ル、干涉ヲ敢テセントスルガ如キ場合ニハ、差當リ三月二十五日閣議決定ノ方針ニ基テ處理シ、我代表ハ總會ヨリ引揚グベク、而シテ聯盟側ガ右ニ拘ラズ依然トシテ反省スル所ナキノミナラズ、更ニ進シテ帝國滿蒙經略ノ根本ヲ覆シ、我國運ノ將來ヲ脅威スルノ虞アル現實的壓迫ヲ加ヘムトスルガ如キ情勢ニ立到ル場合ニ於テハ、帝國ハ最早聯盟ニ留マルコトヲ得ザル次第ナルガ、斯クノ如キ場合ニモ我方トシテハ聯盟側ノ不當ナル行動ニ依リ、已ムヲ得ズ右態度ニ出ヅルノ餘儀ナキモノナルコトヲ、世論ヲシテ充分ニ了解セシムル様措置スルコト。

ハ 列 國

世界各國中米、蘇等聯盟ニ加入シ居ラザルモノハ勿論、英佛其他ノ聯盟國ト雖モ、其聯盟國トシテノ立場以外ニ、夫々固有ノ立場ヲ有スル次第ナルニ鑑ミ、前記對聯盟策ノ如何ニ拘ラズ、各國側ノ特殊事情ヲモリ

用シテ、列國トノ間ノ友好關係ヲ増進シ、帝國ノ國際的地位ノ向上ニ努力スベク、差當リ左記ニ依リ處理スルコト。

(一) 支那問題ニ關スル日英協調恢復ノ望マシキコトハ申ス迄モナキ儀ナルガ、一九二六年末英國政府ノ採用シタル所謂對支新方針、最近ニ至リ多少トモ變動アルニモ鑑ミ、(本年一月突然英國ヨリ我方ニ對シ支那治外法權問題ニ對スル交渉ニ付、協調方申出アリ。我方ハ直ニ之ニ應ジ、將ニ必要ノ交渉ヲ開始セムトシタル折柄、會々上海事件ノ勃發ヲ見タル爲メ其儘トナリ居ル次第ナル處、右協調方申入シモ前記新方針變動ノ傾向ヲ示スモノ、如シ。尤モ英國側ニ於テ引續キ本件交渉ニ對スル熱心ヲ有スルヤハ探索ノ要アルベシ)、此際右情勢ヲ助長シ、日英協調ノ恢復ニ努力スルコト。尙ホ英國側ノ重點ヲ置ク所ガ、支那本部就中上海、廣東其他長江沿岸及南支方面ニ存スルニ鑑ミ、該地方ニ於ケル英國ノ立場ヲ適當ニ尊重シツ、協調ノ歩武ヲ進ムルコト然ルベシ。

(二) 前項ノ日英提携ヲ急速ニ實現スルコトハ、相當困難ナルベキヤニ認メラル、次第ナル處、由來佛國政府ハ我方ニ近似セル對支政策ヲ執リ居ルノミナラズ、今次ノ日支紛爭事件ニ付テモ、我方ニ對シ比較的有利ナル態度ヲ示シ來レル處、佛國側トシテハ其歐洲制覇政策遂行ノ關係上、極東ニ於ケル日佛兩國ノ政治的接近ヲ求メムトスル空氣アルモノ、如キニ付、最近ノ機會ヲ捉ヘテ極東ニ於ケル日佛間ノ一般的諒解ニ關スル話合ヲ促進スルコト。尙ホ極東ニ於ケル日佛ノ接近ハ、日英協調ニ對スル英國側ノ熱心ヲ増スニ與ツテ力アルベシト認メラル。又右日佛間ノ一般的諒解ヲ促進スル爲メニハ、現存ノ日佛協約ヲ最近ノ事

態ニ應ジテ日佛當局者ノ間ニ讀直スコト、シテ話ヲ進ムルモ一策ナルベク、又本邦ニ於ケル安南革命派取締問題、上海ノ佛國租界ニ於ケル朝鮮人取締問題等、具體案件ニ關スル交渉ヲ緒トシテ話ヲ進ムルモ一策ナルベシ。將又佛國側ノ滿蒙方面ニ對スル借款投資ハ、其政治的色彩ヲ伴フコト比較的ニ少ナキニ鑑ミ、英米資本ヨリモ歡迎スベキモノト認メラル。

(三) 目下ノ形勢ニテハ米國側ヲ我對滿政策ノ實行ニ有利ニ誘導スルコト最モ困難ト認メラル、モ、前記(一)、(二)等ノ實行ヲ圖ルト共ニ、門戶解放、機會均等主義ノ運用ニ依リ、米國側ヲシテ滿洲國ニ於ケル經濟的利益ニ相當均霑セシムル等ノ方法ヲ講ジ、以テ米國側態度ノ牽制乃至緩和ヲ圖ルト共ニ、我滿蒙經營ニ對スル極メテ強力ナル障害ノ原因ガ米國側ニ存スルノ事實ニ鑑ミ、同國ニ對シ内外諸般ノ準備ヲ速ニ進メ置クコト。

(四) 近時北滿方面ノ形勢ニ關シ。日蘇關係ハ相當ノ危機ヲ藏シ居ルモノト認メラル、ヲ以テ、我方トシテハ萬一ノ場合ニ應ズル爲メ、速ニ軍事外交其他内外諸般ノ準備確立ニ努ムルト共ニ、現下ノ國際關係ニ鑑ミ少クトモ此際ハ蘇聯トノ衝突ヲ避クルコト極メテ肝要ナルヲ以テ、我方ヨリ進ンデ蘇聯ヲ刺戟スルガ如キ措置ニ出デザル様留意スベク、殊ニ蘇聯側ニテハ我方ノ蘇領又ハ東支鐵道ニ於ケル蘇聯側權益ニ對スル野心、又ハ我方ノ白系露人トノ關係ニ付、疑惑ノ念ヲ抱キ居ルモノ、如キニ付テハ、右等ノ點ニ關シ出來得ル限り蘇聯側ヲ安心セシムル様措置スルコト。但シ蘇聯邦ガ進ンデ帝國ノ滿蒙經路ヲ阻止妨害等積極的態度ニ出テ來ルガ如キ場合ニハ、斷乎トシテ之ヲ迎撃スルコト。

(五) 其他ノ各國ニ對シテモ出來得ル限り友好關係ノ增進ヲ圖リ、且ツ通商ノ圓滑ヲ期スベク、殊ニ和蘭トノ間ニハ先ニ同國側ノ希望ニ基キ開始セラレタル仲裁々判及調停條約締結方ニ關スル交渉ヲ促進スベク又若シ此際同國トノ間ニ前記條約締結交渉ヲ急速ニ進メ難キ事情アルニ於テハ、太平洋ニ於ケル領土の現狀維持ニ關スル華府四國條約ノ趣旨ヲ日蘭間ニ擴充スル取極ノ交渉ヲ、同國トノ間ニ開始スルコト。尙ホ狀況ニ應ジ其他ノ歐米諸國トノ間ニモ、夫々仲裁々判及調停條約締結ニ關スル交渉ヲ進ムルコト。

對 佛 工 作 案

右ノ電報デ明カナ通り、政府ノ意思ハ先ヅ佛國ト話合ヒヲ試ミントスルノニ在ルカラ、其内之ニ關スル具體的表示ノ來ルコト、心待ニシテ居タ所、八月二十七日果シテ左ノ入電ガアツタ。

一、帝國政府ニ於テ近ク滿洲國ヲ正式ニ承認スル曉ニハ、帝國ノ聯盟及米國ニ對スル關係ハ、一段ノ緊張ヲ加フベキ處、齟齬テ聯盟トノ關係ヲ離レテ、各國殊ニ英國佛國等トノ諒解提携ノ餘地ナシト云フ可ラザルハ既電ノ通りナリ。就中佛國側ノ態度ハ引續キ比較的我方ニ良好ニシテ例ヘバ最近多年ノ懸案タル印度支那關稅協定問題ノ解決ヲ見タルガ如キハ、其間何等カノ政治的考慮ノ存シタルニ非ズヤト想像セラレ、又支那調查委員ノ中ニアリテ「クロードル」將軍ヲ表示セル好意的態度ノ如キモ、同將軍ノ一存ノミニ基クモノニハアラザル様思考セラル、次第ナリ。(尙ホ佛國「コミテ」ド、フォルジュ」筋ノ對滿投資ニ付同「コミテ」等ガ何等カ了解ヲ與ヘ居リタルヤニ想像セラル、ハ、貴電御來示ノ通りニ有之、又現首相

「エリオ」ガ就任ノ際貴大使ニ對シ、滿洲問題ニ付日本ヲ援助スベキヤノ口吻ヲ洩ラシタルハ是亦貴電ノ通りナリ。而シテ佛國側ノ態度ハ當然我國ニモ反映シ、目下本邦各方面ニ於テ佛國トノ提携ヲ希望スル氣運強ク、一般輿論モ同國ニ對シ頻リニ好感ヲ寄せ居ル現狀ナルニ付、此雰圍氣ヲ利用シテ兩國ノ關係ヲ一層緊密ナラシムル建前ノ下ニ、虛心忼懷ニ佛國側ト意見ノ交換ヲ開始スルニ於テハ、結局何等カ兩國ノ「アンタント」ニ達シ、之ヲ我が國際的立場ノ開拓ニ利用スルコト不可能ニアラズト存ス。

二 右方針ノ題目トシテ當方差當リノ思付ハ。

(一) 今後極東ニ於ケル（就中對支政策ニ關スル）兩國ノ協調。

(二) 帝國ノ滿洲國承認後ニ於ケル佛國ノ滿洲ニ對スル希望條項。

(三) 軍縮會議ニ於ケル共同歩調。

(四) 明治四十年日佛協約ノ讀直シ。

(五) 蘇聯邦ニ對シ採ルベキ態度。例ヘバ帝國政府ガ蘇國側ヨリ不侵略條約締結方ニ關スル提議ヲ受ケ居ルコト御承知ノ通りナル處、右ニ關聯シ佛國ガ同條約ノ假調印ヲ爲スニ至リタル動機ヲ確ムルコト。（尤モ不可侵條約締結問題ヲ初メ、蘇國ニ對スル我方ノ態度ニ關シテハ、未ダ廟議充分ニ決定シ居ラザルニ付我方ノ態度ヲ「コンミット」セザルハ勿論、其他餘リニ深入セザル様御留意アリタシ）

尙ホ安南革命派取締問題ハ、先方ヨリ申出アルヲ待チテ考慮スベク、我方ヨリ口ヲ切ラザルヲ良シトス。

三、尤モ右等ノ點ニ關シ、佛國ト本邦トノ間ニ「アンタント」ヲ成立セシムル爲メニハ、紆餘曲折ヲ要ス

ベキコト勿論ナルモ、早キニ及ンデ佛國側ト話合ヲ開始シ置クニ於テハ、自然滿洲問題ノ聯盟上程ノ際、佛國ノ態度ヲ我方ニ有利ニ導ク手懸リトモ成ルベク、又若シ我方ト聯盟トノ關係ガ決裂ニ立至ル破目トナルモ、我方ノ立場ヲ有利ナラシムルニ資スベシト認メラル、ニ付、貴官ハ貴地陸海軍武官トモ聯絡シ、最近ノ機會ヲ捉ヘ、可然筋道ヲ辿ツテ、本件話合ヲ進ムル様御配慮アリタシ。

佛國トノ提携工作ハ筆者ノ使命ニシテ、之ガ達成ノ爲メ日本出發前ヨリ畫策シ、殊ニ巴里着後種々腐心セル次第ハ、曩ニ述ベタ如クデ、佛國ノ實情ガ毫モ我期待ニ副ハヌコト、是亦既ニ記シタ通りデアル。ソシテ前記帝國政府ノ來意ハ頗ル皮相迂遠極マルモノデ、單ニ日本ノ滿洲國承認ニ關聯シテ湧起スベキ波瀾ヲ收拾セントスル一時的摸糊策ニ過ギヌ様ニ感得セラレ、右ハ畢竟淺薄卑近ナ所謂策士連ノ獻策ノ結果カト想像サレタカラ、筆者ハ是迄ノ體驗ヲ一括シテ左ノ如ク外務大臣ノ反省ヲ促シタ。

御來示ノ日佛「アンタント」ハ要スルニ對支政策就中滿洲問題ニ關スル佛國ノ態度ヲ、我方ニ有利ニ導カントスル御方針ト察セラル、處、卒直ニ卑見ヲ申サバ、貴電中二御列舉ノ諸點ヲ以テシテハ、日佛間ノ「アンタント」ヲ成立セシムル基礎タルコト困難ナルト同時ニ、我方ガ却テ手ヲ燒クガ如キ結果ヲ招來セズヤト思ハル。例ヘバ對支問題ニ關スル日佛ノ協調ニ付支那本土ニ有スル列強ノ利害關係ニ顧ミ、英米ノ參加ナク佛國單獨ニテ日本ト握手セントハ到底云フマジク、又軍縮會議ニ於ケル共同歩調ニ付、本使ガ今次軍縮會議ノ模様ヲ側聞セル所ニ依ルモ、斯カル放膽ナル約束ヲ爲スコトハ不可能且ツ危險ナベク、卑見ヲ以テセバ、支那問題ニ關シ日佛ノ「アンタント」ヲ作ル場合ニハ直チニ英米トノ機微ナル關係ヲ生ジ、

佛國モ英米ニ氣兼ねスルヲ以テ實現性ニ乏シカルベク、日佛「アンタント」開談ノ端緒ハ、之ヲ過般上海ニ於ケル爆彈事件ニ引懸ケ、八月二十四日着貴電中(二)御來示ノ上海佛租界等ニ於ケル不逞分子及安南革命派取締問題ニ關スル情報交換ニ求ムル外ナシト思考セラル、處、本件ニ關シ我方ヨリ口ヲ切ラザル様トノ御趣旨ノ内情一應承知致度ク。(電外註、此内情ハ筆者能ク承知シ居ルモ、本問題ト日佛提携希望ノ兩者ヲ天秤ニ掛ケ、帝國政府ノ眞意ヲ推斷セント欲セシニ外ナラズ) 幸ニ右ニ依リ交渉ノ糸口ヲ得バ、更ニ一步ヲ進メ、日佛ノミガ極東ニ利害關係ヲ有スル問題ニ話ヲ及ボシ、例ヘバ極東ニ於テ佛國ガ最モ關心ヲ有スルハ印度支那ノ安全保障ノ問題ナレバ、結局我方ニ於テ印支ノ安全ヲ保障シ、要スレバ佛ハ亞細亞大陸ニ於ケル日本領トシテ朝鮮ノ安全ヲ保障スト云フガ如キコト、セザルニ於テハ、日佛丈ケノ提携案トシテ佛國ヲ渦中ニ投ゼシムルコト殆ンド望ナキ様ニ思ハル。尤モ此件ニ付本年五月十三日日印支關稅協定調印ヲ終ヘタル際本使ハ「タルヂュー」首相ガ故「クレマンソー」ノ直系トシテ親日傾向多キニ鑑ミ、同首相ニ對シ日佛親善増進ノ急務ヲ説キ、全然私見トシテ近來極東ハ支那ノ事態全ク混亂シ、加フルニ共產派ノ運動益々甚シキヲ加ヘ、日佛亞細亞大陸領モ不安ヲ生ズル次第ナルガ、此際一步ヲ進メテ右領域ノ安全ヲ保障スル途ヲ講ズルコト事宜ニ適スト思考スル旨ヲ述ベタルニ對シ、同氏ハ右ニ關シ自分モ大ナル關心ヲ有スル次第ナルガ、英國ヲモ之ニ加フルヲ要スベク、又米國ハ近來支那問題ニ付頗ル神經過敏ナルニ付、米國ヲ除外シテハ其「サツセブチビリチー」ヲ害スベシト云ヒ、同首相サヘ躊躇ノ色ヲ示シタル程ナレバ、「エリオ」首相ガ個人トシテノ親日感ハ相當強シトスルモ、社會急進黨ノ一般空氣ニ鑑ミ、果シテ

何程ノ乘氣ヲ示スベキヤ。何レニセヨ御趣旨ノ次第ハ、本使ニ於テモ東京出發前既ニ共鳴シ居ル儀ニ付、其成功ノ爲メニ出來得ル限りノ努力致スベキ決心ナルガ、之ニ先チ豫メ前記二點ニ關シ何分ノ御開示有之様致度

右ニ對シ東京ヨリ次ノ電報ヲ受取ツタ。果シテ豫想通り、政府ハ一時ノ彌縫策トシテ佛國ヲ籠絡セントスル底ノ腹案ナルガ如ク考ヘラル、ガ、十數世紀ノ間狹隘ナ地域デ相互折衝シタ歐洲ノ一國ガ、容易ニ斯クノ如キ誘ヒノ手ニ乗ルトハ思ハレヌ。

日佛兩國間諒解提携ノ達成上、種々困難ノ存スベキハ御來示ノ通りナルモ、現下ノ重大時局ニ鑑ミ、此際出來得ル限り我方ニ有利ナル國際環境ヲ作ル趣旨ニテ、從來列國中比較的我方ニ友好的態度ヲ示シツ、アリト認メラル、佛國側ノ政府筋ハ勿論、信賴シ得ベキ方面トノ間ニ、各般ノ問題ニ付「フリー、トーキン」ヲ試ミ、以テ何トカ「アンタント」ノ緒ヲ引出シ、假令急速ニ具體的結果ニ到達セズトスルモ、其間佛國ノ同情好感ヲ繋ギタキ考ナリ。而シテ既電ノ二ニ揭ゲタル所ハ、右會談ノ題目トシテ當方ノ思付ヲ例示シタルモノニシテ、其他ニモ種々ナル題目アルベク、要スルニ貴官ノ御裁量ニ依リ、先ヅ最モ都合ト思考セラル、題目ニ依リ、成ルベク速ニ佛國側ト話合ヲ開始シ、上記趣旨ニ添フ様、極力御努力ヲ希望スル次第ナリ。尙ホ支那問題ニ關シ日佛「アンタント」ヲ計ル場合ニハ英米トノ間ニ機微ナル關係ヲ生ズルコトヲ顧慮シ居ラル、處、米國トノ關係ハ暫ク置キ、此際我方ガ佛國トノ間ニ極東問題ニ關シ接近ヲ計ルコトハ、之ニ依リ或ハ英國ヲ誘引シ、日英協調ヲ促進スルコトアリ得ベキハ、既電時局處理方針中ニ申進シ

タル通りナリ。

又會談題目中印度支那ノ安全保障問題ハ既電ノ目的ニ合致スル次第ニテ、之ニ付テハ會談ヲ試ミラル、コト固ヨリ差支ナキモ、我方ノ對價ヲ朝鮮ノ安全保障ニ求ムルコトニ付テハ尙ホ篤ト考慮ノ要アルニ付、差當リ極東ニ於ケル我特殊權益ノ尊重ヲ要求スル趣旨ニテ話合ヲ進メラレタシ。

將又本邦ニ於ケル安南革命派問題ハ、此等一派ガ我國政界其他ノ有力ナル筋ヨリ、永年義俠の庇護ヲ受ケ來レルガ如キ機微ナル關係アルニ付、積極的取締ヲ行フ爲メニハ、豫メ國內ノ充分準備ヲ爲スノ要アリ從ツテ此際佛國側ノ態度ヲ見究ムルコト無クシテ、進ンデ本問題ニ關シ口ヲ切り、我方ヲ「コムミット」スルコトハ之ヲ避ケタク。「フリー、トーキング」ノ間佛國側ヨリ本件ニ關シ提議シ來ルニ於テハ之ヲ利用スルコト、シ、以テ其間本邦ニ於ケル準備ヲ進ムルコト、致シタシ。

佛國ノ「ブルジョア」乃至上流階級ガ如何ニ日本ニ同情アリトスルモ、五月ノ總選舉デ議會ハ左黨合同ノ爲メニ多數ヲ制セラレテシマツタカラ、我方ノ工作ハ先ヅ絶望ノ形デ、此事ハ筆者累次ノ報告デ政府當局ニ能ク判ツテ居ル筈デアル。然シ筆者トシテモ何トカシテ日佛提携ノ歩ヲ進メタイノハ山々ダカラ、前ニ書イタ様ニ「ドリル」ヲ滿洲ニ送り、其他出來ル丈ノ努力ハシタガ、佛國ノ最モ喰付テ來ルト思ハレル題目ニ付テハ、日本ガ逡巡ノ色ヲ示シテ居ル。其内情ハ能ク了解出來ルガ、元來滿洲國ノ承認ハ何モ一刻ヲ爭フベキ理由ガ無イ。若シ之アリトスレバ、日滿双方ノ對内關係ニ出發シ、聯盟乃至世界ニ對シテ公然喧嘩ヲ賣ルノデアルカラ、其實行ニ當ツテハ所信ニ向ツテ斷然タル決意ヲ示スベキデ、盲龜浮木のノ女々シキ工作ニ出

ヅベキモノデ無イノミナラズ、斯クノ如キ態度ハ畢竟内兜ヲ見透サレ、徒ラニ輕侮ヲ招ク所以デアルカラ、此工作ヲ爲スニハ極メテ慎重デナクテハナラス。之ニハ何カ頗ル適切ナ問題ヲ捉ヘテ交渉ノ糸口ヲ切ル必要ガアル仍テ筆者ハ前記往電ニ引續イテ左ノ至急電報ヲ發シタ。

當方ニ於テハ往電ニ對スル御回訓ヲ待ツ一方、如何ニ本問題ノ口ヲ切ルベキカニ關シ、種々考慮ヲ廻ラシ居ル次第ナルガ、佛國ガ最モ重キヲ置クハ對獨關係ニシテ、殊ニ最近獨逸側ノ軍備平等權ニ關スル申出アリ、政府トシテモ目下之ヲ對策ニ腐心シ、自己ノ主張ヲ支持スル國ノ一國ニテモ多カラコトヲ望ミ居ル實情ナル處、實ハ勞山會議ニ於テ我方ヨリ可然向ヲ通シ「エリオ」ニ對シ我方トシテハ佛國ノ死活問題タル賠償問題ニ付テハ佛國ニ不快ナル態度ヲ執ラザルベキニ付、佛國ニ於テモ支那問題ニ關シ同様ノ態度ニ出ヅベキヲ期待スル旨通知シタルニ、牒報者ノ報ニ依レバ「エリオ」ハ右我方ノ態度ヲ多トシ居タル趣ナルガ、是等ノ事情ニ鑑ミ、日佛「アンタント」ヲ結バントセバ、「ヴェルサイユ」條約維持ノ點ニ關シ我方ニテ佛ヲ支持スル代リニ、滿蒙ニ付佛ハ日本ヲ支持スルト云フ如キ「ライオン」ヲ組入レテ話ヲ進ムルコト、彼ヲ惹付クル上ニ最モ有効ト認メラル、ニ付、右ニ御異存ナキニ於テハ來週勿々話ヲ進メ度キ所存ナリ。

九月十二日及十九日筆者「エリオ」首相會談

此電報ニ對シ内田外相カラ異存ナシトノ返事ガアツタ故、筆者ハ昭和七年九月十二日「エリオ」首相兼外相

ヲ訪問シ、先ヅ軍備問題ニ付テ獨逸ト交渉ノ模様ヲ尋ネタ處、「エ」ハ直チニ往復文書ノ寫ヲ取寄セ、之ヲ筆者ニ手交シタカラ、筆者ハ本件ハ「ヴェルサイユ」條約ニ關スル問題故、當然主要聯合國ニハ少クトモ相談アルベキモノト思フト述ベタシニ、「エ」ハ右ハ勿論ノコトデ、佛國ノ回答ハ佛國側ノ見解ヲ示セルニ止マリ、爾餘關係國ハ各自ノ見解ヲ有スルコトヲ前提トスルモノナレバ、此點ハ吳々モ諒解アリタイト答ヘタ次デ筆者ヨリ對獨條約ニ關スル事項ニ付、從來日本ガ佛國ヲ支持シ來ツタコトハ御承知ノ通りニテ、賠償問題ニ付テハ海牙及勞山ニ於テ佛國ヲ助ケ、軍備事項ニ付テモ日本ハ右態度ヲ持續スルコト、思ハル、處、對獨條約問題ガ佛國ニ取り死活ノ問題タル如ク、滿洲問題ハ日本ニ取り死活ノ問題ナレバ、佛國モ前記日本ノ態度ニ照應シ、滿洲問題ニ對シ殊ニ壽府ニ於テ、我方ヲ支持セムコトヲ期待スル。若シ聯盟ニ於ケル過激分子ガ從來同様ノ態度ヲ持續セバ、筆者ノ見ル所デハ妥協ノ餘地ナク、遂ニ行詰リトナルデアラウガ、之ハ頗ル遺憾デアル。就テハ何トカ此行詰リ打開策ヲ考慮スル必要ガアルト思フ。全然筆者限リノ私見デハアルガ例ヘバ聯盟側カラ日支滿三國間ノ交渉ヲ勸奨スルガ如キ方法ヲ提議スレバ、或ハ事務局ヲ好轉セシメ得ルカトモ考ヘル。日本ハ支那本部ニ付テハ單ニ商業上ノ關係ヲ有スルノミデ、爾餘列強ト全然同ジ立場ニ在ル、日英同盟ノ廢棄ハ日英兩國ノ何レニモ相當惡影響ヲ及ボシ、支那ノ排外運動ヲ強ムル結果トナリ、英國ハ漢口租界ヲ失ツタ。御承知ノ通り支那ニハ今ヤ共產黨ガ非常ニ勢ヲ得ツ、アリ。事態ハ極メテ險惡ダガ、之ニ付テモ列強ガ共同一致シテ支那ニ臨ム政策ノ復活ハ焦眉ノ急デアル。ソシテ現在日本ガ支那ニ關スル協約ヲ持ツテ居ルノハ唯佛國ト丈ケデアルガ、若シ佛國側デ希望サレルナラ、印度支那ニ付今少シ具體的ノ取極ヲスル

コトモ可能ダト思フト述ベタ。

此時迄默然ト聞イテ居タ「エリオ」ハ初メテ口ヲ開キ、前極東艦隊司令長官「エール」提督ガ先頃歸佛シ、同提督カラ日本ニ於ケル極東艦隊ノ歡迎振ヲ聞イテ大ニ其好意ニ感激シテ居ル次第ダガ、又提督カラ日本ノ文化ト支那ノ現狀ニ關スル詳細ノ説明ヲ聽キ、支那ガ如何ニモ悲觀スベキ狀態ニ在ルコトヲ切實ニ感ジ、同時ニ日本ガ極東ニ於テ文化ノ維持者タルコトモ真ク了解シタ、自分ハ今迄日本ノ友人デアツタ、今後モ然ルベキコトハ改メテ云フ迄モ無イガ、今ハ個人タル資格ヲ離レ、政府ノ當事者トシテノ意見ヲ述ブレバ、滿洲問題ニ關シテハ事實ノ方面ヨリスル見地ハ自分モ真ク了解スルガ、本問題ニハ又法律の半面ガアル。自分ハ國際約定ノ神聖及遵守ト云フコトヲ飽迄高調シ、又之ヲ要求シテ居ルモノデ、滿洲問題ニ關聯シ種々國際條約ノ關係モアル様ニ考ヘル。兎ニ角ク御話ノ趣旨ハ真ク了解シタカラ、壽府ニ於テ日本ガ難局ニ立ツ様ナコトガアツタラ、出來ル丈ケノ努力ヲ爲シ、之ヲ緩和スルニ盡力シ、日本ノ期待ニ添フベシト告ゲタ。

筆者ハ今法律の方面云々トノ御話デ、何カ日本ニ條約違反ノ行爲アル如ク考ヘテ居ラレル様ニモ聞ユルカト前置シテ、事變以前ニ於ケル支那ノ行動及事變勃發當時ニ於ケル事情等ヲ詳細説明シ、我方ノ行動ガ自衛權ノ行使以外ノ何者テモ無イコトヲ力説セルニ、「エ」ハ實ハ是等ノ事實ニ付テハ少シモ知ツテ居ラヌ故、何レ研究ノ上本問題ノ法的方面ニ關スル事項モ取調ベタク思フテ居ルト述ベタカラ、筆者ハ日本側參與員ヨリ「リットン」委員會ニ提出シタ書類ガ間モ無ク届ク筈故、着ノ上ハ早速送ルカラ之ニ依リ研究サレ度イト云フタラ、「エ」ハ之ヲ謝シ、興味ヲ以テ研究スベキヲ約シタ。

此日ノ會談ヲ終ルニ臨ミ筆者カラ、只今述ベタ一般支那問題乃至印度支那問題ニ付何カ御考アリヤト尋ネタラ、「エ」ハ日本側カラ何等提議サルレバ之ヲ研究スルニ吝カナラズト答ヘタガ、同氏ハ九月二十日聯盟總會ニ出席ノ爲メ壽府ニ立ツカラ、十二日ノ會談ノ結末ヲ付ケル趣旨テ、十九日ニ往訪シ、筆者カラ過日會談ノ要領ハ早速政府ニ報告シタ處、政府ハ之ヲ承認シ、此「ライン」デ話ヲ續ケルコトヲ許可シテ來タ。就テハ日本ニ取り死活問題タル滿洲問題ニ關シ佛國側ノ支持ヲ得タク、日本ハ佛國ノ直面セル對獨問題ニ付、出來ル限りノ支持ヲ與フル用意ガアル。右ニ關シ佛國政府ノ意見ヲ承知シタイト切り出シタラ、「エ」首相ハ後段ノ點ニハ興味ヲ感ゼヌ模様ヲ少シモ之ニ言及セズ。前段ニ關シテ口ヲ開キ、過日モ御話セル通り自分ハ佛國ガ調印シタ條約ニ關スル問題ヲ除ク外ハ、出來ル丈ケ日本ヲ支持スル積リデアルガ、條約尊重ノ問題ニ付テハ佛國ノ立場モアルコト故ト云フタカラ、筆者ハ口ヲ插ミ、日本政府ハ其調印セル如何ナル條約ニモ違反セル如キ何等ノ行爲ヲモ爲シテ居ラス。之ハ政府及全國民ノ確信スル所デ、此事ハ七月十二日及十四日兩日ニ亘リ内田外相カラ詳細「リットン」委員會ノ諸氏ニ説明シ、委員モ納得シタコト、思フガ、何レニセヨ日本ノ主張ト之ニ反對ノ意見トハ、追ツテ討究ノ上ニ非ザレバ輕々ニ批判ヲ下スベキモノテハナイ、今一方ノ意見ノミニ基キ、如何ニモ日本ヲ條約違反國ナルガ如ク考フルノハ極メテ輕卒テアル。結局滿洲國ガ其自決權ニ依リ自然ニ成立シタモノダト云フコトガ明カナレバ此問題ハ解決セラレルノデアル。巴里ノ新聞中ニハ日本ノ滿洲國承認ニ關聯シ、日本ガ條約違反國タルコトノ前提ノ下ニ評論ヲ加ヘタモノガアル。如何ニモ外務省ノ旨ヲ含ンテ書カレタ様ナ感想ヲ抱カセタト云フタラ、「エ」ハ彼ガ持ツテ居ル意見ニ鑑ミ筆者

ノ攻撃ヲ自分ニ向ケラレタモノト思フタ如ク自分ハ決シテ斯様ナコトヲ新聞記者ニ語ツタコトハナイ。今後モ亦斯ル事ヲ口ニセヌト切りニ辯解シタカラ、筆者ハ其様ナ意味デ述ベタノデハ無イト説明シタラ「エ」ハ或ハ外務省ノ事務官中ニ斯ル事ヲ口走ツタ者ガアルカモ知レヌ。若シアリトセバ今後斯ルコトノ無イ様充分警告シテ置コウト約シタ。筆者ガ「タン」ノ論說ニ夫レトナク言及シタノハ、此論說ガ當時外務省デ羽振善イ「レジエー」カラ「インスピレート」サレタ形跡ガアリ。「レ」ハ「エリオ」ノ信任ヲ得來タツタトノコト故若シ其親支那態度ガ「ブリアン」當時ノ如ク「エ」ヲ亦感化シテハ、夫レコソ由々敷大事ダト考ヘ、事前ニ之ヲ防止センモノト思フタ爲メニ外ナラス。

「エリオ」首相ハ更ニ語ヲ繼ギ、自分ノ意思ハ實際の見地カラ問題ノ解決ヲ計ルコトニ努力シ、之ニ依リ日本ヲ支持セントスルニ在ル處、之ガ爲メニハ事件ヲ「プレシビテート」セズ出來ル限り慎重ニ事ヲ運ブヲ最モ必要ト信ジ、壽府ニ於テモ此意味テ行動シタイ考デアル。現ニ昨日モ有名ナ在巴里支那人來訪ノ際事件ヲ急進セヌ様懇々説得シタ。若シ之レ以外ニモ日本カラ何カ希望ガアレバ遠慮ナク申出ラレタク。本日會談ノ内容ハ自分ニ於テモ此室以外ニ漏サル故、其含デ居テ貰ヒタイト附ケ加ヘタ。